

Report from the EDGE

ディスレクシア (Dyslexia) とは.....

知的に問題がなく、聴覚、視覚の知覚的機能は正常なのに、読み書きに関して特徴のあるつまづきや学習の困難を示す症状のことをいいます。

EDGE は.....

ディスレクシアの正しい認識の普及と教育的な支援を目的とした特定非営利活動法人 (NPO) として、2001年10月に認証・設立され、活動しています。

Nice to meet you

絵本「私の弟」 館野 智恵子

ディスレクシアの人にとって、自分はディスレクシアなのだ気づいて、それを受け入れることは、大きな最初の1歩だと思います。

そして、「自分は馬鹿じゃない」と知ることはジャンプ台の役目をします。

次のステップは、周囲の人たちがディスレクシアであることを知って、「怠けているのではない」と思ってくれることです。

何度聞いても覚えられないディスレクシアという言葉、日本語訳も一つではありません。22年前にイギリスの小さな小学校で、息子がディスレクシアではないか、と言われたときの驚き、不安、戸惑いを昨日のこのように覚えています。説明を聞いてもよく分からず、振り返ってみると誤解していたことも、かなりあります。

息子がディスレクシアとはっきり認定されたのは、15歳になってからです。本人は「自分は馬鹿じゃないんだ」

と知って、すっかりしたと言っています。そして、そのときが転機になりました。大学、大学院と化学の道にすすんだ息子は去年就職し、来月結婚します。

親としてはホッとしたところで、読みやすく簡単に、分かりやすいディスレクシア紹介の絵本を作ることを考えつきました。絵をかいたのは娘です。で、「私の弟」というタイトルが自然にできあがりました。絵本に書かれていることは全て実話ですが、モデルは息子だけではありません。

ディスレクシアは人に



～読み書きが困難な学習障害 (LD) の息子と母の成長物語～

ぼくは、ディスレクシア

Reading David

リサ・ワインスタイン 吉田利子=訳

医学博士でもある著者の息子は「ディスレクシア(読字障害)」と診断された!

心理分析の専門家として、自身も多くのLDの子どもたちをみてきた著者。

母であり医学博士でもあることが引き起こす苦悩と、それゆえの冷静な視点。

息子デヴィッドとの生活、スピーチ・セラピーや自宅学習、この体験から学んだ教訓など、

息子を愛する著者と、母の事が大好きな息子の二人の言葉で綴られた、ディスレクシアとの格闘の日々。



よって、程度や問題のあるところが違います。絵本を見て、「違う」と思う部分もあると思います。「同じだ」と思うところもあるでしょう。読者の方には、それぞれ一番好きなページができるのではないかと思います。私はピエロとコックさんの絵がある、「誰にでも上手にできることと、できないことがある」というページで、いつも涙ぐんでしまいます。左側のページの絵と思い出が重なっているからかもしれません。

児童教育振興財団から助成金もいただき、昨年10月に

1000冊自費出版した「私の弟」です。エッジのみなさん、友人、知人、家族の協力で日本各地に広まっています。

この原稿を書いた1月にはエッジに200冊残っていました。大学の研究室、大学病院のLDセンター、病院、YWCA、YMCA、教育委員会、そして、たくさんのお母様たちが買っていただきました。

一人でも多くの方に読んでいただき、役に立ってほしいと思っています。

そして、増刷の機会ができるよう祈っています。

「私の弟」はEDGE事務局でお買い求めいただけます。定価¥1,000 送料別

港区との協働

2004年12月に成立した発達障害者支援法はディスレクシアを初め、軽度の発達障害を持つ人への理解を促進するものではあるが、実際に国のレベルから都道府県、そして市町村、特別区まで下ろしてくると、行政だけの力では、とてもサマランカ宣言でうたわれているきめ細やかな、ひとりひとりのニーズに合った対応はなかなか出来ない。

港区では、2003年度より港区パートナーズ基金を設立して、NPOと行政が協働して、区民に貢献できる活動に対して行う事業に、助成金を出している。又、港区内には現在600以上のNPOが事務所を構えている。その中でも、10年以上前から地道に活動を続けてきているテクノシップというNPOが、特別支援教育のうち、従来からの障害と、自閉症や軽度の知的障害者に対するの支援が出来るスクールボランティアの育成を、一期目のパートナーズ基金を利用して行った。2004年度はNPO法人EDGEが加わり、ボランティア育成と啓発、そして仕組み作り検討委員会を立ち上げた。検討委員会の中では区内のニーズ、リソース、既存のサービス、行政間の調整などを、行政からは保健福祉部、教育委員会、港区社会福祉協議会の参加を得、明治学院大学緒方明子教授のアドバイスのもとでテクノシップとEDGEが協働して行った。

港区における包括的な取り組みの仕組みを考えると同時に、実践的かつ効果的な支援が出来るような提案を行った。この提案を受けて2005年度は相談コーナー(気軽な相談から検査、個別の支援計画の作成)、リソースコーナー(ひとりひとりの学習スタイルに合った教材の紹介や補助機材の使用、DAISY化した図書の紹介等)、発達障害に関するわかりやすい文献やサポートなどの情報をそろえた情報コーナーからなる個別支援室を開設した。また、区内の学校へ派遣できる学習支援員(LSA)の育成講座を開催して年度内に60名

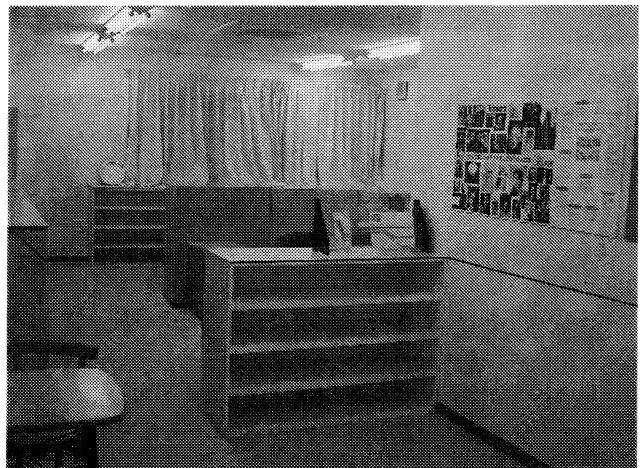
のLSAが誕生する。

また相談は始まっており、4月からの新学期に向けて動き始めている。

相談の内容は様々である。しかし、まだまだ目立たないLDに関しての相談は少なく、行動面や社会性の問題に関する相談から始まることが多い。医師に診断を受けていても、どのような対応をすることが良いのかまでアドバイスをもらっていることは少ないし、学校からの問合せも、学校での対応方法がわからないことが原因の相談が多い。

NPOが行政と協働して行うことの意義は、地域に根付いたきめ細やかな対応が出来るということと、行政の堅苦しさをNPOの柔軟さで補うところにあるように思える。サービスの利用者に対して、行政側の目線ではなく、保護者や当事者の目線から、そして専門性を持って対応できることにある。

あとは学校の現場での理解が進み、専門的なLSAが効果的に学習の支援が出来る環境が整うことが望まれる。このような取り組みをぜひ全国にも広めたいと思う。(文責：藤堂)



DAISY 図書をつくらう

視覚障害の方々には文字で表された書籍が読めません。このため、本を朗読してテープに録音し、これをテーププレイヤーにかけて聴き取るという方法が取られてきました。しかし、パソコンの発達により、書籍と朗読の声を電子化し、パソコンで読み聴きする方法が開発され、国際規格が構築されました。これが DAISY です。日本では財団法人日本障害者リハビリテーション協会が開発と普及を担っています。

DAISY 図書はパソコンで読み聴きする電子図書ですが、視覚障害の方ばかりでなく、ディスレクシア、特に読むのが苦手な人々のサポートに大変有効です。DAISY 図書を読むにはパソコンで専用のソフトを立ち上げ、CD に格納された DAISY 図書を開きます。ディスプレイに図書が表示され、録音された声で読み上げが始まります。文章の読み上げる部分の色が変わるので、どこを読んでいるのかが解ります。カラオケで歌詞の色が変わるのと同じです。もちろん、絵や写真も表示されます。EDGE ではディスレクシアの子どもに向けた絵本や教科書の DAISY 図書を進めようと考えています。

DAISY 講習会の開催についてはメルマガ等でお知らせしていますが、2005 年度は 11 月初旬と 11 月末から 12 月にかけて 2 回開催し、合計 18 名の方が 3 日間の講習を受講しました。講座の講師は日本障害者リハビリテーション協会の方で、受講者の条件はメールを送受信できればよいとの事でしたが、技術的な素養も必要とされ、一部の方々には少しきつい講座となりました。DAISY 図書の作成手順は次のように行ないます。

まず、図書の素材を準備します。素材はテキスト（文章）と画像（写真や図面）で、講習会ではあらかじめ準備されていましたが、新たな作成に

はテキストをワープロ等で入力したり、画像をスキャナで読み取る必要があります。

次に、この素材を XHTML ファイルに貼り付けていきます。XHTML とは DAISY 図書の構成を記述する言語で、インターネットのホームページの構成を記述する HTML の兄弟のようなものです。この XHTML はアルファベットの羅列ですから、まずは「ぎょっ!」としますが、我慢して先に進みます。素材のうち、テキストは読み上げる区切り（色が変わる区切りにもなる）を決め、その前後にタグという決められた文字を挿入します。画像は表示する位置を決め、その箇所に画像が格納されたファイル名を指定します。これを図書全体について行い、最終的なチェックをプログラムで行ないます。

次は、テキストを読み上げる朗読です。パソコンにヘッドセット（マイクとイヤホンが一緒になったもの）を繋ぎ、専用のプログラムで、先ほど作成した区切り毎にテキストを読み上げ、録音します。読み違いは結構ありますので、後から聴きなおして、間違いを録音しなおしたり、余計な録音を削ったりという編集を行ないます。以上が全部終われば、ファイルを CD に書き込んで DAISY 図書の出来上がりです。

素材の作成、XHTML ファイルの作成、読み上げるテキストの区切りの作成、朗読の録音、編集というステップを踏むわけですが、結構根気が必要です。EDGE では技術的な処理、ディスレクシアにとって解り易いテキストの区切り（年齢によって段階がある）の設定、聴きやすい朗読という役割分担をして、DAISY 図書の作成を進めようと考えています。

（文責：内田）

日本発達障害ネットワーク (JDD ネット) の発足

日本発達障害ネットワーク 代表 山岡 修

1. 日本発達障害ネットワーク (JDDネット) とは

JDDネットは、従来制度の谷間に置かれ支援の対象となっていなかった、あるいは適切な支援を受けられなかった、自閉症、アスペルガー症候群その他の広汎性発達障害、学習障害、注意欠陥多動性障害等の発達障害のある人およびその家族に対する支援を行うとともに、発達障害に関する社会一般の理解向上を図り、福祉の増進に寄与することを目指している。また、JDDネットは、発達障害関係の当事者団体が発起団体となったが、発達障害関係の全国団体・地方団体や発達障害関係の学会・研究会、職能団体なども含めた、全く新しいスタイルの幅広いネットワークであり、障害の種別、学会・学派、職種、立場や主張、地域等の壁を越え、当事者支援を主眼に置いたネットワークである。

2. 日本発達障害ネットワーク (JDDネット) の概要

昨年12月3日、成蹊大学で設立協議員総会を開催し正式に発足した。当日、第一回理事会を開催し、正会員として日本LD学会、日本自閉症スペクトラム学会、日本臨床心理士会、全国ことばを育む親の会の4団体、エリア会員として28団体の加盟が承認され、設立当初の参加団体は、発起団体も含め37団体となった。また、設立当日に「日本発達障害ネットワーク設立記念フォーラム」を開催した。発達障害の各分野の第一線で活躍する講演者や出演者が揃ったことから、約650名の参加者があり、各会場とも立ち見が出るほどの盛況で、熱気に溢れた充実したフォーラムとなった。

JDDネットの当面の活動としては、都道府県単位のエリア活動の組成、会報の発行等による会員団体相互の交流・情報交換、特別支援教育や発達障害者支援への取り組み状況調査、発達障害に関する理解啓発活動、他の研究機関や参加団体と協力した発達障害児者の実態調査、実態把握のためのスクリーニング・ツールな

どの検討、人材育成のためのセミナーなどの実施などを計画している。

3. JDDネットが目指すもの

特別支援教育の推進や発達障害者支援法の施行により、発達障害者に対する取り組みや理解は格段と進展してきたが、まだまだ未完成である。発達障害のある子ども達は、「何を考えているか分からない」と見られてしまうこともあるが、言葉が出なくても、表情が乏しくても、実は繊細で色々な才能を持った子ども達なのである。また、「やる気がない」と誤解されることもあるが、本当はこの子ども達は、「僕も勉強ができるようになりたい」「私も褒められたい」「仕事ができるようになりたい」「一人暮らしをしてみたい」「結婚したい」という気持ちや夢を持っているのである。発達障害のある当事者と家族が夢を持ち、充実した社会生活が送れるようになることを、そしてそれに関わる全ての関係者の発展に繋がることを目指し取り組んでいく方針である。

JDDネットは当事者団体、学会、研究会、職能団体等、発達障害に関係する非営利の団体であれば加盟ができる新しいスタイルのネットワークである。また全国団体だけでなく地域で活動する小さな団体も全国団体等の支部でなければ、直接JDDネットに参加することが可能であり、多くの団体に入会いただければ幸いである。入会方法、その他詳細については、JDDネットのHP (<http://jddnet.jp/>) をご覧いただきたい。



設立総会にて 2005.12.3

英国・スウェーデン視察旅行報告会

グレートブリテン・ササカワとスカンディナヴィア・ササカワの助成金を得て、7月に行った高等教育と就労に関する視察の報告会が11月14日に開催されました。やっと日本でも幼稚園から高等学校までの取り組みが始まらんとしていますが、まだまだ高等教育の場や就労の場での支援や配慮はおろか理解さえもされていないのが現状です。先進国ゆえの悩みもあるようですが、私たちも活動を促進する上で大いに参考になる部分もありました。

学芸大学教授の上野先生、ノンフィクションライターの品川さん、NPO EDGEの藤堂会長、職員の堀田さん、柴田が次々に発表しました。それぞれパワーポイントを使い、説得力のあるプレゼンテーションでした。上野先生は専門的立場で、品川

さんはライターとしての鋭い切り口で、堀田さんはディスレクシアの人々が就労するさいの支援器機に関して実演を交え見せてくれました。その後、私（柴田）が当事者の目で、パワーポイントなしで感想を述べ、最後に藤堂さんが今回の視察旅行の目的と成果を発表しました。それぞれ個性的で、聞きごたえのある発表でした。質疑応答は上野先生と品川さんに質問が集中しましたが、時間が足りず、聴衆の方々には申し訳ありませんでした。時間不足を残念に思いました。（藤堂／柴田）

○報告会のまとめを作成しましたので、ご希望の方は事務局までお申し込みください。実費でお分けいたします。

英語塾の感想

彼が中学に入学する際に、英語の学習が心配だったので、慎重に英語の塾を探しました。好き嫌いが年齢とともに非常にハッキリしてきているので、合わない塾だと駄目だろうというのも、わかっていました。いろいろ探し、エッジと英語専門の塾にしました。2つの塾に通わせる事にしたのですが、エッジの方では会話と耳から英語を学びながら親しみ、もう一つの英語塾では学校の教科書で理解できない部分を補おうと思っていました。11月の中旬に（エッジではない方の）英語塾からの話で、そちらの方の塾を辞めることになりました。その時点で初めて、本人がそこでのやり方が合わず、そこに行く事で英語が嫌いになっていた事がわかりました。エッジでの英語はどうか、改めて本人に聞いてみました。エッジでの英語は楽しいという答えが返ってきました。彼の中で、3つの英語があったようで、1つは学校、1つはエッジの英語、もう1つは英語塾

内田 雪江

の英語でした。初めて英語を学んだ彼にとって、それぞれが別々だったようです。今、彼が話す英語の言葉を聞くと、エッジで身につけた英語であるように感じます。まだまだ文法や、スペルは基礎が不安定ですが、発音と単語を読む手がかりを探す様子を見ていますと、ゆっくりではあるが、彼の中に教科書では学べない英語が育っているように実感しています。そして、もう一方の英語塾が、英語専門の塾だったのに型にはまった教え方しかせず、彼を英語嫌いにさせていた事に今更ながら、無駄な時間を費やしてしまったと、反省をしています。

エッジの英語、エッジの先生大好き少年は、小冒険をし、微妙な遅刻を繰り返しながら六本木のあの校舎にせせせと通っています。

☆4月から土曜日の午後の部も予定しています。ご興味のある方は事務局までご連絡ください。

第三回ディスレクシア当事者会

集まりは年末の寒い日曜日（12／11）の午後、六本木のエッジ事務所で行なわれました。参加人数は8名、新参加者は3名（すべて女性）。今回は「自分の弱みはなにか」という題で意見を交換しました。参加者の悩みは次の通りでした。「数字の概念を捉えるのが難しい」「電話番号をよく覚えられない」「文字がぼやけて見えて、本を読むのに苦勞する」「聞き取りが苦手で、人に誤解を与える」「仕事の優先順位がうまく決められない」といった苦手な面を披露しました。

当事者ではない人々には、「弟が統合失調症」「娘がLDで何をやっても続かない」などの悩みがありました。それぞれ、自分たちの「弱み」と「対処法」を順々に発言しました。皆さん、周囲の人々に悟られないように、涙ぐましい努力してきたことが伺えました。一人の発言者が長時間、話し続けることはなく、ルールを守った紳士的なものでした。今回も、Mさん（男性）が参加者のために料理の腕をふるってくれました。話合う前に食べることができたので、腹が満たされていたことが幸いしたのかもしれない。

ディスレクシアで苦しんでいても、原因がわかれば、明るく対処できます。「出来ないこともあるが、出来ることもある」。出来ることに自信を持って、それを伸ばす努力をすればいいの

です。8月の第1回ディスレクシア当事者会のとき、参加者は長所を語ることに躊躇がありました。回を重ねることに恥ずかしがらず、堂々と言えるようになりました。これは世話人として、非常に嬉しいことでした。「弱点をどうやったら補強するかを考えるより、長所を伸ばすこと」に重点を置く、この方針が皆さんに少しは浸透してきたのでしょうか。「ディスレクシアであることがわかった瞬間、気持ちが楽になった」と言う意見が増えてきました。例えば、聞き取りが苦手なら、録音機器を使って録音しておいて、後で聞き返せば、問題ありません。別に悩む必要はないのです。

最後に、自分の苦手な面が得意な人を探し、協力してもらおうと上手に乗り切れるという意見がありました。そうです、人間、自分一人で生きようとしなくて、持ちつ、持たれつ、相手の苦手な部分を助けてあげると相乗効果で互いに幸福になれます。どんな優秀なスポーツ選手も、好成績を上げるには多くのスタッフの協力が必要なのです。そのパートナーを探す方法が次の当事者会の課題になりそうな気がしました。（文責：柴田）

☆ディスレクシア当事者会は2ヶ月に一回行っています。ご興味のある方は事務局柴田までご連絡ください。

平成17年度事業報告 特定非営利活動法人エッジ

2004年12月の発達障害者支援法の成立を受けて、日本は大きく発達障害者の支援へ一歩を進めることとなった。少なくとも啓発の意味は大きく、テレビ、新聞などでも取り上げられるようになった。

しかし、あくまでも自閉症を中心とした動きが主で、一番目立たないディスレクシアがどのように扱われるのかは不透明である。EDGEは12月3日に発足したJDDnetの発起5団体の一つとなり、そのことにより啓発及び発言力が大分増した。

EDGEは従来通り、啓発、サポートとネットワークを3本柱の事業展開をした。

1) 啓発は従来のメルマガ、ニュースレターはもとより、港区を中心とした学校単位、スクールカウンセラー、児童館での講座、講義、テレビ番組、雑誌記事、単行本出版協力などの活動を通してディスレクシアのポジティブなイメージを定着することを主眼とした。

2) サポートは一生を通じてのサポートを考慮し、以下の活動を行った。

- ・研究としてディスレクシアのスクリーニングツール
- ・海外の視察はスクリーニング、LSA、高等教育と就労、当事者の自助の調査
- ・学習支援員（LSA）養成講座（8月、9月）の開設
- ・港区個別支援室（相談、リソースコーナー、情報コーナー）の開設
- ・当事者の会の開催
- ・英語教室の開催

特に港区の個別支援室の発足と港区内の学校に配置されるLSAの育成と相談窓口は、2004年9月から港区と協働で行ってきた仕組み作り検討委員会から生まれたものであり、2005年度の11月1日から稼働を始めた。相談事業、LSA派遣事業、教科書等のDAISY化を開始している。

3) ネットワーク

発達障害者支援法の成立を受けて12月3日にJDDnetが設立された。日本全国をカバーするネットワークを形成して、行政や社会への働きかけ、研究などを共同で行うことになる。

LDとその仲間達の啓発を目的とした「愛をはこぶ入キャンペーン」から事務局を業務委託され、ソープ氏の絵画展とワークショップの様子はNHK教育テレビの福祉ネットの番組で放映された。

海外視察では英国のADO、スウェーデンの自助団体などと会合を通して連携を組んだ。

4) 運営は六本木事務局に常勤1名、契約で3名、ボランティア10名、浜松町個別支援室に教育委員会より1名非常勤、相談員2名、常勤事務員1名、六本木と兼務2名で実施した。LSA第1期生として27名が誕生した。

NPO エッジの2005年決算報告

収入の部	
会費入会金収入	487,000
事業収入	2,584,808
その他収入	6,393,885
当期収入合計	9,465,693
支出の部	
事業費	3,413,824
管理費	4,714,066
固定資産税	329,400
当期収支差額	1,008,403
前期繰越収支差額	1,390,375
時期繰越収支差額	2,398,778

平成18年度年事業計画（案） 特定非営利活動法人エッジ

EDGEは従来通り、啓発、サポートとネットワークを3本柱の事業展開をする。ディスレクシアという言葉もLD学会などでも定着をし始めており、専門的には発達性読み書き障害と呼ばれるようになってきている。

1) 啓発は従来のメルマガ、ニュースレターはもとより、折角定着し始めたポジティブなイメージをさらに進めて、キャンペーンも含めての展開にしてゆく。ホームページの充実、ジェイミー・オリバーなどの新しいディスレクシアの人へのアプローチ、出版、取材への協力を継続する。

2) サポートは一生を通じてのサポートを考慮し、学習支援員（LSA）育成講座の充実、他地区、他分野（家庭教師、塾）への普及、港区個別支援室（相談、リソースコーナー、情報コーナー、LSA育成講座、派遣）の運営を通じて港区内の児童生徒、保護者及び教師へのサポートを充実する。スクリーニング・ツール、英語の教育方法と並び、スタディー・スキル、マルチセンサー・アプローチ、教材の開発（教科書のDAISY化）、既存のソフトや機材の適用などに着手する。

3) ネットワークは、2005年12月3日のJDDnet発足をうけて特別支援教育と共に発達障害者支援に関連したネットワーク作りをめざす。地域のネットワークとしてJDDnet東京と港区内の住民、LSA、学校、福祉保険関連、PTAなどを含むネットワーク。ディスレクシアのスクリーニングができる人たちのネットワークなどを考えている。海外では漢字圏の国におけるディスレクシアへの対応などを組む。

4) 運営

- ・六本木事務所は2007年7月までの使用許可なので本年度中に転居先のめどを付けてゆきたい。体制は事務局常勤スタッフ1名、契約で3名（週1日から3日）、会計、庶務、LSAによるボランティアと藤堂。
- ・個別支援室は、事務局常勤1名、教育センターより週3日出勤予定の職員1名、相談員（臨床心理士、LSA）、教材開発（DAISY講習修了者ほか）、六本木と兼務2名
- ・会計は契約で吉川会計士事務所に依頼

新刊図書

和書

- ★「大学におけるリメディアル教育への提言
英語のつまずきに関して」
中村 朋子 著
大学教育出版 2005/10/30
- ★「福祉・介護の仕事完全ガイド」
福祉ドアリサーチ 著
株式会社 誠文堂新光社 2005/10/1
- ★「『誰でも社会』へ デジタル時代のユニバーサルデザイン」
関根 千佳 著
株式会社 岩波書店 2003/7/15
- ★「脳を育む 学習と教育の科学」
OECD教育研究革新センター 編集
小泉 英明 監修 小山 麻紀 訳
株式会社 明石書店 2005/2/20
- ★「アクセシブルテクノロジー ITと障害者が変えるビジネスシーン」
Gary Moulton 他3人著
株式会社 ユーデイト 監訳
日経BPソフトプレス 2003/3/17
- ★「神経学要因による読み書き困難に対する多方面からの
支援」
加藤 醇子・宇野 彰・藤堂 栄子・品川 裕香 著
文部科学省 科学技術政策研究所 科学技術研究センター
2006/1

洋書

- ★"The Misunderstood child"
Larry B.Silver 著
Human Services Institute TAB BOOKS
- ★"Dyslexia in the Workplace"

Diana Bartlett & Sylvia Moody 著

WHURR PUBLISHERS

★"Dyslexia and Foreign Language Learning"

Elke Schneider and Margaret Crombie 著

David Fulton Publishers

事務局

最近の活動紹介

2005年

- 10月12日 品川区LD疑似体験
- 10月17日 スクールカウンセラー講演
- 10月19日 港区赤坂中学LD疑似体験
- 10月27日 大田区福祉講座講演
- 11月1日、7日 (再放送)NHK教育テレビ「福祉ネット」
でディスレクシアに関する放送
- 11月8日～10日 第1回DAISY講習会
- 11月14日 英国・スウェーデン調査報告会
- 11月29日 港区スクールカウンセラー講演
- 11月30日～12月2日 第2回DAISY講習会
- 12月3日 JDDnet設立記念フォーラム・成蹊大学

2006年

- 1月11日 第二期LSA養成講座開講
- 1月20日 港区児童館にて講演
- 1月26日 チャイルドライン委員会(子育てに関
する企業とNPOの協働)
- 1月28日 発達支援ワークショップにて講演
- 2月1日～15日 ホテルオークラにてソープ絵画展
- 2月19日 EDGE総会およびLSAフォローアップ
の研修
- 4月2日 JDDネット理事会
- 4月13日 イートン校コンサート

メディア 情報

NPO EGDEの活動が新聞に取り上げられました。

2006年

- 1 / 20 読売新聞 教育ルネサンス
○「人材」育成NPOが協力
- 1 / 23 日本教育新聞
○NPOと連携で養成「学習支援員」(東京・港区
教委)
○学校の特別支援体制サポート
- 1 / 29 朝日新聞
○発達障害児に勉強の手助けを
○支援員、自前講座で養成
○東京都港区「全校への派遣可能」に

★テレビ放映から

- スカイパーフェクトTV「黒岩祐治のメデイカルレポート」
2 / 18, 25 (16:00～16:30) と 2 / 19,
26 (10:00～10:30) に放送されます。
○ディスレクシアについて大阪医大の竹田契
一先生と藤堂親子が出演

NHK教育テレビ「福祉ネット」

- 2 / 27 (20:00～20:29)、再放送3 / 6 (13:
20～13:49)
○「アートでつなごう ～日比野克彦、マッ
ケンジー・ソープ～」という内容で、ディ
スレクシアの画家マッケンジー・ソープが
紹介されます。



映画「イン・ハー・シューズ」の紹介

ディスレクシアの女主人公が活躍するアメリカ映画が昨年11月に公開されました。まさに、NPO EDGEの啓発活動にマッチした映画でした。ディスレクシアである人間がどのように生きたらよいか。この映画から学ぶことは大きいものです。以下、感想です。

◆イン・ハー・シューズの感想◆

「分からないことはなんとなくごまかす」、「日付は忘れる」、「美貌を武器にキャスターに応募するけれど原稿がすらすらと読めないで立ち往生」、これは2005年末から劇場公開された映画「イン・ハー・シューズ」でキャメロン・ディアスが演じるディスレクシアの主人公マギーである。弁護士で堅物のお姉さんから見ると、どうしようもなくだらしのない暮らしをしているマギーだが、あるきっかけでそれは馬鹿だからではなく、ディスレクシアだからと分かり、自分の思いもしないクリエイティブな才能に気づき、長い間音信不通だった祖母の力添えで幸せになってゆくというストーリー。

信頼してくれる人、自分の得意な部分を生かすこと、そして自分はまんざらではないと思うことの大切さは、日頃EDGEが講演などでお話している内容そのもの。

是非ご覧あれ。

(文責：藤堂)

◆イン・ハー・シューズに感激◆

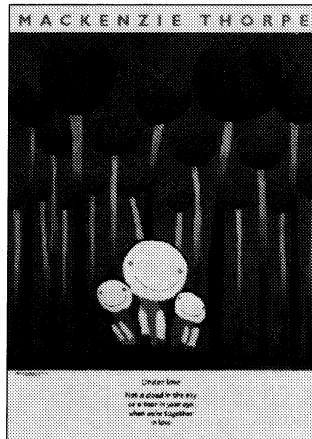
今、公開されている映画「イン・ハー・シューズ」は、ディスレクシアの主人公がまっとうに仕事に就けず苦勞する話が出てきます。まるでだれかさんの実話に近い話です。内容に関しては、映画を見る前に内容を詳しく書くと興味を失ってしまうので止めます。米国でもディスレクシアがひどいと堅気の生活が送れない一つの例として、ぜひ見ておかれると良いと思います。これからLSAの皆さんが相手をするだろう小学生、中学生の将来が垣間見られます。堅気になれなくても、ひよんなきっかけから主人公のマギーが自分の天職（イン・ハー・シューズ）を見つけます。そう、ディスレクシアの人々は普通の一般職ではなく、専門職を見つけた方が自分を生かせるのです。なんだか、久しぶりに胸に染みいるいい映画でした。

もう一つ言いたいのは、女性でもディスレクシアで苦しんでいる人々がいることです。この前のLSA講座のときも、当事者で発言したのは男性ばかりでした。女性はきわめてまれなんではないかという声もチラホラありました。私はそんなことはないと確信しています。私の教えた女生徒の30パーセントぐらいはそうだと感じていました。ただ、講座を受けていた皆さんは実感がなかったのかもしれない。それでは時間があつたら、ぜひこの映画を見て下さい。(文責：柴田)

愛をはこぶ人キャンペーン

「愛をはこぶ人キャンペーン」は軽度の発達障害に関する啓発を目的として2003年から繰り広げられています。ディスレクシアであり、世界各国で色々な困難さを抱えるこどもたちのためにチャリティーイベントを数多く行っている英国人画家のマッケンジー・ソープ氏が日本でも何か出来ないかというときにちょうどめぐり合いました。

4年目に当たる2006年はEDGEの啓発の一環と捉え、昨年末に設立されたJDDnetとも連動しつつ、絵画展を通じての啓発活動、ソープ氏来日時LDを初めとする子供たちとのワークショップを引き続き開催するとともに、一般の方たちにわかりやすい講演会やディスレクシアやLDで成功している人たちに登場いただくイベントにも取り組むつもりです。



Under Love

私たちの願いは、多くの方に理解を頂き、ひとりひとり子どもにとって本来の能力を活かす何らかのきっかけとなることです。

5月の大型連休には横浜の赤れんが倉庫で絵画展を初めとするイベントを企画する予定です。

Report from the EDGE - 第10号 -

2006年2月25日発行

発行者 NPO法人EDGE

発行責任者 藤堂栄子 東京都港区六本木4-7-14

みなとNPOハウス4F

Tel.03-5413-3356 Fax.03-5413-3358

編集 NPO法人EDGE事務局

印刷 株式会社 信英堂

<http://www.npo-edge.jp>

[email:info@npo-edge.jp](mailto:info@npo-edge.jp)